名所物見の旅　其の四拾八 – 裏剱を巡って

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

朝四時半に起きだして山小屋の窓から外を窺うと、あわただしく雲は動いているものの、雪はもう止んでいるようだった。出発の支度を整えて外へ出ると、連日の吹雪であたり一面はすべて雪に埋もれている。正面に見えるはずの剱岳の頂上部は雲に隠れ、姿を見せている中腹から下は白一色。一週間前に黒部・立山アルペンルートの室堂まで来た時はまったく雪はなかったのでたかをくくっていたが、ここ北アルプス北部の山域は、十月の上旬でも吹雪けばすぐに雪に閉ざされてしまい動きが取れなくなる。

これから下って行く剱沢の雪渓は時期的に最悪の状態で、ズタズタにクラックが走っていて、いつ崩壊しても不思議はなく、クレパスに落ち込めば永遠におさらばということにもなりかねない。剱沢小屋の親爺さんから雪渓のコース取りの説明をさんざん受けたが、新雪で表面のクラックが隠されてルートの確認が難しくなるという不安がある。

裏剱を目指して剱沢の谷を進む。行く手の雪渓には大きなクレパスが口を開けて待ち構えている。

日の出と同時に歩き始め、平蔵谷が見えるまでは絶対に雪渓に降りるなという教えどうり、雪渓脇の滑りやすいガレ場を慎重に進む。やがて平蔵谷出合で雪渓に降り、言われたとおりのルートを忠実に下る。雪渓の表面が新雪に覆われているので、アイゼンを装着しても効きが悪い。斜面はだんだん急になり長次郎谷の出合で雪渓歩きは終了、左岸の岩場に飛び移った。夏の初め頃ならもっと下まで雪渓歩きが出来るのだが、この時期はここまでが精一杯である。

所々鎖やロープで確保された登山道をなおも下ると、真砂沢ロッジに出た。小屋全体が石垣で囲われている。冬季、雪崩で建物が潰されないための予防策であろう。小屋番の人達は小屋仕舞いで忙しそうだ。この周辺の山小屋はだいたい七月上旬から十月上旬までの営業で、その期間以外は雪に閉ざされてしまう。またこの先の二股など剱沢に掛かるいくつかの橋は、小屋仕舞いと同時に撤去される。雪が来ればいずれ雪崩で流されてしまうからで、この時期以降に入山する登山者は自分の力で川を渡らなければならなくなる。

裏剱の歴史と共に歩んできた池ノ平小屋。大正五年に建設されたモリブデン鉱山の飯場や事務所がその前身で、現在の小屋は昭和三年の再建から三代目となる。

仙人池にその鋭鋒を映す剱岳。日本を代表する誇るべき名景である。

二股から仙人尾根の急登を二時間半頑張り、やっと仙人峠に到着。ここから右に行けば15分で仙人池ヒュッテ、左に行けば30分で池ノ平小屋がある。この一帯は裏剱と呼ばれる山域で、仙人池を前景にした剱八峰や池塘が点在する別天地・池ノ平から仰ぎ見る剱岳のチンネやジャンダルムの岩峰は万人を魅了してやまない風景を見せてくれる。池ノ平小屋は大正時代に採掘されていた池ノ平山のモリブデン鉱山の事務所や飯場がその前身で、昭和三年から何度か再建され現在に至っている。一方仙人池ヒュッテのほうは今年79歳になるカリスマお母さん志鷹静代さんが健在で、仙人池のお母ちゃんと慕われ、いつも多くのファンや取り巻きに囲まれている。十年ほど前にＮＨＫのドキュメンタリーで放映されてからは、一段と有名になった感がある。静代お母さんの話によると、今ではどこの山小屋でも荷揚げはヘリに頼っているが、お母さんが若い頃は30キロの荷を担いで室堂から一日でこの小屋までボッカしたというから驚く。私も学生の頃合宿ともなれば30キロ以上、時には40キロ近くを担がされたが、一日で室堂から仙人池まで歩くことは不可能だったろう。

裏剱のような奥深い山中の山小屋に泊まる登山者は金と暇と体力がある中高年が圧倒的に多いといわれていて、連泊する客が多いらしい。金のない私も今回は撮影の天気待ちも考慮に入れて仙人池に三泊することにしたが、幸運なことにこの日から連日晴天に恵まれた。

翌朝、仙人池の池畔にカメラを構え、剱岳が赤く染まる一瞬を待つ。気温は氷点下2度まで下がっているが、風がないので寒さは感じない。航路羽田から富山まで飛んで、そこから丸二日。苦労して登ってきただけにシャッターのレリーズを握る指にも力が入る。私は剱岳を水面に映す仙人池の風景は、日本を代表する名景として十指に入るだろうと思っている。そしてこの風景を撮影するために、カメラだけで12キロ、トータル24キロの荷を担ぎ上げた。年齢的に無理ではないかと危惧していたが、自分の体力に少しは自信も取り戻し、こうして撮影できる喜びを一人噛み締めていた。

撮影も一段落してフィルムの整理をしてると、仙人池のお母さんは並べてあった私の撮影機材を見て、「あなたもすっかり取り憑かれてしまいましたなぁ」と微笑むのであった。

今年（2009）も暖かく登山者を迎えてくれた仙人池ヒュッテのお母さん。来シーズンもまた再訪してお世話になりたいと願う登山者は大勢いることだろう。